ネタだけど割と使えた能力で頑張ります

亜真夜間

注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

急に転生。そして手に入れた特典も少し微妙？そんな感じから原作を壊しに行く転生者たちの話

あらすじだけじゃ伝わらないそんな話です

目次

原作開始前
第1話 1
第2話 5
第3話 9
第4話 13
第5話 17
第6話 23
第7話 28
第8話 31
第9話 36
第10話 41
第11話 51
番外編1 55
第13話 59
第14話 64
第15話 70
第16話 76
番外2 81
番外3 85
番外4 89

原作開始前
第1話

「はい、ということで転生してもらいます」
「え、唐突すぎるんだけどていうかなんで！」
　真っ白な部屋の中に来たと思ったら転生してもらうとか急に言われて理解ができません。
　どうしたら良いんでしょうか？
「はい、それではこの箱から特典を引いてください。今回はくじ引き式が採用されました」
「少し待ってくださいまだ理解できないんですけど」
「特典を引いてください」
「いや、だから待って」
「特典を引いてください」
「え、だから待っ「特典を引いてください　特典を引いてください　特典を引いてください　特典を引いてください特典を引いてください特典を引いてください特典を引いて

ください特典を引いてくださいい特典を引いてください」うわアアアアアアアアアアアアアア!!」

駄目だこいつッ！ＮＰＣだッ！うわ〜、どうしよう。

描写がないだけでまだ言ってきてるし引いたほうがいいのかな？

「よし、これだ！」

『バイキンマンの頭脳』

「チェンジで！」

「変更は不可能です」

ッ！なんてことだ。転生特典がやつの頭脳だとッ！アンパン野郎のことしか考えてないだろッ！

「あと二つ引くことが可能です」

よしッ！まだ希望はあるッ！

『神様セレクション　寄生刀　阿吠毛丸』

「ナニモノッ！これ、ナニモノッ！」

「神様セレクション、それは髪がつくりしネタでありチートである便利？な特典のことです。

ちなみに阿吠毛丸は刀ですね、使い手に寄生するタイプの。試運転できますけど使い

ます？」
「やりますよ！当たり前でしょ！」
　やばい、何一ついい特典がないぞこのままじゃ！
「準備しますのでそれまでに最後の特典引いてください」
「よしラストは決める、オリャアアアアアアア！」
　『ハズレ（笑）』
「絶望したッ！自分の運のなさに絶望したッ！」
「あい、特典は全て決まりましたね。それでは阿吠毛刀の試運転に入ります、どうぞ」
　ニュッ
「嘘だろ、アホ毛が生えた。しかもこれ自由に動くッ！」
「良かったですね。それ、割と使えますよ。見た目がネタだけど」
　くそう、ホントに微妙な特典しかないッ！
「それでは逝きかたを選んでください。いーじー、ハード、究極、Ｈｅａｖｅｎから選べます」
「待って、その選択肢はおかしい。てかＨｅａｖｅｎってなに！」
「わかりました。Ｈｅａｖｅｎですね。いやー度胸あるわー」
　こいつ、話聞かねぇ！一体何されるんだちくしょう。

「Ｈｅａｖｅｎだよ」
「「「「「「「「全員、集合ッ!!!」」」」」」」」
なんかきたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁうわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!!
くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ：@：「
「あ、そうそう。転生先はブラックブレットです。ちなみにこの転生はミスとかではなくただの暇つぶしです」
え、すごく重要なことをさらりと言われたきがする。

第2話

転生してから早十年。飛ばしすぎと思った方のために回想シーン?入ります。

「わーい十歳になった。なんかみんなが私の事天才って呼んでくれるお」

回想終わり。

えっ?全然何があたかわからない?じゃあわかりやすく言いますよ。

私の特典は宇宙ーィイ!チェンジとか言ってすいませんでした。あなたたちすごい。めっちゃ使える。

これはほかの人にもおすすめしたいね。バイキンマンさんめっちゃ頭良いねすごい。

アホ毛丸、私はもうお前無しではでは生きていけないよ。

そうそう、言いたいことがあったんだ。

神様は確かここがブラックブレットの世界と言っていたよね。でもね、

ガストレアがいないんだ。　一体原作何年前だよ。ちくせう。

まあ、安全な時代に生まれたと安心しましょう。今は小学生。今日も学校。

友達をガン見して楽しんでますよ。ロリは大好きです。え、私の性別ですか？
女ですけど何か？

あれからまた十年経ちました。私には二つ、悩みがある。
まず一つ目それは、
「成長しない。ハハッ、六年生で成長止まるとかありえね」
あの時はまだ成長すると信じていたんだ。
中学生、あれ伸びない。高校生で伸びるタイプなのかな。
高校生、おかしいな。シンチョウガノビナイヨ。マナイタダヨ。
そして今大学生、
「ぬぁぜだアアアアア！身体測定の時から一ミリも変動がないッ!?１４０、１４０で打ち止めなのか！」
「あ、あはは。しょうがないよ、刃姫ちゃん。

それよりもこの新しくできたこの魔法少女コスを来て写真を撮らせてほしいな」
「みじん切りにするぞコラァッ！」
二つ目の悩みはこいつ。名前は篠野乃束音《しののののたばね》。
転生者で私の部下であるのだが、特典の元ネタ同様自由なやつでそのくせ優秀なので扱いに困るやつだ。
見た目は元ネタと少し違い猫耳で貧乳。そしてだれにでも愛想がいいのでモテモテだ。
私もロリコンどもにモテるけどねッ！ちなみに刃姫ちゃんというのはわたしのことで、フルネームは
阿良々木刃姫《あららぎばき》という。キラキラネームを通り過ぎてなんかギラギラした名前になった。
正直親のセンスを疑う。先生たちによく暴力団系の家の子だと間違われる。敢えて言うが家はかまぼこ工場だ。
「そんなこと言わずに着てよ～　刃姫ちゃ～ん」
こいつッ！まだ言うか。よろしいならば、
「やれアホ毛！みじん切りだ！」
「ちょっ　あぶっ」

私のアホ毛丸こと阿吠毛丸をなめるなよ。阿吠毛丸は長さ、切れ味、形、動きが私の思い通りなのだ。
そしてアホ毛丸自体にも意思がある。逃げ場はないぞ！
「覚悟ッ！」
「奥義！　　しまう」
あっ！こいつ量子変換しやがった。クソ、これじゃあ手が出せない。
アホ毛もしょんぼりしてるぞ。
しかし、ほんの数秒の追いかけっこのせいで研究室がめちゃくちゃだな。
うわ、レポートが真っ二つ。
「片付けるぞ」
「はーい」

第3話

「おい、東音」
「なんだい、刃姫ちゃん！」
「これどうするよ」
「・・・・・・」
「おい」
大変なことになりやした。ええ、ほんとに大変です。一大事です。
なんと、なんと！
グガアアアアアアアアア
新しくできたウィルスをマウスに使ってみたら、化物に変化しました。
投与したらコテッと死んだのでありゃ失敗と思ったのですが。
覚醒しましたね。というかこれ、
「ガストレアウィルスじゃね？」
「刃姫ちゃん、似てるだけだよきっと違うよ。ほらきっとTウィルスだよ」
「いや、それもそれでヤバイだろ。というかバラニウムとアホ毛丸でしか傷つかないん

だから確実じゃね？」
「ハッハッハー。オワタ、人類の危機」

どうもどうも視点かわりましてみんなのアイドル束音さんです☆
いやーしかしさすが天才二人が揃うとやばいですね～。
転生特典の篠ノ之束の頭脳わたしはこんな感じですけど、刃姫ちゃんはどんな特典なんでしょうか。
ひとつはあのふざけたアホ毛だってわかったるんですけどねー。残りはなんだろ。
そうそう、あのアホ毛、わたしが転生者バレした原因で刃姫ちゃんと仲良くなれたきっかけなのですが私たちが仲良くなった時のことを話しましょうか

そうあれはある日の昼食時のこと
「おいおまえ、愛が足りてないぞ。実験用のマウスを殺しすぎだ」

そのとき刃姫ちゃんはアホ毛を『愛』の形にしながら言ってきたのです。
だからわたしは言ってしまったのです。
「は、そんなものコンビニで売ってますよ。二百九十八円で。どうせなら今から買って来て・・・あ」
「やはり貴様転生者か」
『やべぇ』わたしはこの時これしか頭にありませんでした。そして墓穴を掘りました。
「はぁッ!?え、何言ってるかわかないんだけど!?ていうか何、八九寺ネタがわかったからって転生者扱いってひどくないスカねぇ!?」
「この世界ではヤツは八七寺だ。そして、愛のくだりはなかった」
「オワタ」

まあ、こんなやりとりのあと刃姫ちゃんはお腹まで同類だとわかったので仲良くなりました。
そして、今！原作に進むための分岐点にいます。そう、
「「やべぇ、マジやべぇ。人類の危機マジやべぇ」」
「あのね刃姫ちゃん、アホ毛でヤバすってやるのやめて。緊張感なくなるから」

「そのツッコミがなければ緊張感は残っていたぞ」

「「どうしてこーなった♪どうしてこーなった♪」」
「うわぁッ！なんか歌ってる人達がいるッ！」
「「ヤベっ、新人が来た」」
今日も楽しく頑張りますので神様、よろしくお願いします。

第4話

とつぜんですが、僕は誰でしょう？

答えは新入りです。

名前は蓮山悟《はすやまさとる》といいます。

つい二ヶ月前に変人の巣こと『新型細菌開発部』というふざけたところに配属されました。

もともとは細菌研究所だったところを博士と先輩が奪ったそうです。何してんだよあんたら。

そうそう、自分　転生者です。

新入りが来てから二ヶ月？くらいたった。どうも、刃姫です。

この研究室、転生者しかいない。なぜ？

それはそうとついにガストレアウイルスをどうするかが決まりました。
「刃姫ちゃーん。ロケットのエンジンでけたー」
そう、ロケットで宇宙の彼方へ飛ばそう　ということになりました。
しかし問題は山ほどある。え、何原作?んなもん知るかッ!安全第一じゃボケ。
「博士～。やはり太陽系の外まで飛ばすにはそれなりの大きさにしないと無理ですよ」
「何言ってんだッ!こーはいくん!不可能を可能にするのがっ私達だろ!」
「いや、無理だから」
やはり、エンジンの出力は足りるが燃料が足りなくなってしまう。
そのため、燃料タンクが大きくなりロケットも大きくなってしまうのは仕方がないのだが・・・
「蓮山、無理でもやらないといけないんだよ。ガストレアウイルスは危険だ。
なるべく内密に処理しなくてはならない。ペットボトルロケットサイズが理想なんだ、五百ミリの」
「まあ、そのサイズで燃料さえあれば太陽系の外まで飛ぶエンジンを作るあたり流石だと思いますけど」
「えへへ～。褒めて褒めてー」
「はいはい、先輩はすごいですよ。もちろん博士も」

「ああ、ありがとう」
「褒められちゃったー」
　しかし、本当に燃料さえあればな。何か方法はないものか。
「そういえば、ガストレアウイルスが世界中にばらまかれたのって原作では何年くらいでしたっけ？」
　そういえばそこら辺どうなんだろうなあまり覚えてないが。
「えっとね、一巻冒頭で二〇二一年人類はガストレアに敗北したって書いてあったからそんぐらいじゃない？」
「へぇ～　よくそんなこと覚えてますね。もうこっち来てから二十年以上経ってるでしょ」
「ふふふ、もう今年で二十五なんだぜ？ちなみに刃姫ちゃんは今年で二十六」
「え、見えない。ずっと飛び級で博士やってるのかと思ってた」
「おい、今のどういう意味だ。みじん切りにするぞコラァ！」
「ごめんなさい。僕が悪かったですッ！」
　ハァ。しかしどうしたもんかね、ロケット。爆発粘菌とか使えるかな？いや無理か。
　何かいいものないかね、何年かけたら見つかるかなー。
「とりあえず何年かかってもいいように不老不死になる薬とか作ろう」

「りょうか～い」
「いや、そんな軽い感じで作っていいもんじゃないでしょそれ」
「え、三十分もあれば作れると思うんだけど？」
「常識というものがここにはないのかッ!?」

第5話

「ところで博士」
「何だ、蓮山」
「今何年ですか？」
「二〇一七年だがそれがどうした」
「原作においての人類敗北は？」
「二〇二一年だねー」
「ヤバくないすか？」
「やばいねー」
「真面目にやばいかもしれんがそれまでに宇宙に吹っ飛ばせばいいだろ」
「だよねー」
「ですよねー」
「「ハハハハハハ」」

まだ平和だった夕暮れ時の三人の転生者の会話。

今、私たちは窮地に立たされている。なぜなら、

「博士に先輩」

「なんだ」

「なんだいこーはいくん！」

「研究所が燃えていてさっきなにか飛んできましたね」

「そうだな」

「きっと中途半端に燃料入っていたロケットに引火したんだねー」

「「ヤバイ、人類の危機だこれ」」

二〇一九年春の出来事だった。出火原因は放火。

なんか私たちに自分の研究を先に完成された恨みらしいが正直なんてことをしてくれたんだって感じだ。

「今何年？」

「二〇一九年でわたしの予想だと落ちてくるのは二〇二〇年の十月から十二月あたりかな」
「どうします?」
　いや、マジでどうする。こうなってしまったカラには何か対策を立てないと確実に死ぬ。
　それもまあ重要なことなんだが、
「「研究資料回収しなきゃ、あれはまだ人類には早すぎる」」
「おい、あんたらなにつくろうとしてた。てか、燃えない紙に書くな」
　ヤバイ、うちの研究資料は他人の手に渡ったらやばい。世界征服も夢じゃない兵器が作られてしまう。
「それよりも今後のこと考えましょうよ。どこを拠点に活動するかとか」
「それもいいんだけどな?マジで研究資料はヤバイからさ」
「そうだよーこーはいくん!あの中から一つでも手に入れれば世界の覇権が握れるからね!」
「あんたらホント何作ってたんだッ!?」
　いやー　ね、蓮山が来てからはツッコミ要員がいたから度が過ぎたものはなかったんだけどその前はね。

　自重しなかったんだよ、私たち。いやーあの頃は馬鹿だった。毎日のように二人でゲームの武器や技を科学力にものを言わせて再現しては紛争地帯を更地に変えていたんだよな。懐かしい。
「そうそう！今後のことといえばわたしね、やりたいことがあるの！」
「先輩のやりたいことってロクなことにならないじゃないすか」
「まあ、いいだろ？どうせやることないし」
　コイツのやりたいことだ、退屈はしないさ。
「あのね、卒業文集にも書いた将来の夢だったんだけどね叶えられそうだから言うね」
「早く言え」
「もうせっかちだなー。わたしはッ！実はいいやつだった系のラスボスになりたいんだッ！黒幕っぽい」
「はあッ!?」
「いや、言ってることの意味がわからないんですけど先輩」
「だからね、わたしはッ！実はいいやつだった系のラ「二度言わんでいいッ！」ちぇ」
　何を言ってるのかわからない。そして何それ楽しそう、と思ってしまった自分が恥ずかしい。
　つまりコイツはあれか主人公に倒されたいのか？

そしていいこと言って実はみんなのために悪だったみたいにしたいと？
いや、
「さすがに無理だろ」
「刃姫ちゃん、不可能を可能にするのがっ！私たちだろっ！」
「でも楽しそうですよねちょっと。主人公に「お前、まさか」っとか言われてかっこよく消えるんですよね？」
「そうそう！そして主人公が
「ほんとにみんなを救ったのはあいつなのかもしれない」とか回想シーンで言うんだよ！」
「楽しいのか？それ」
「「最高に楽しいと思います!!」」
ハァ・・・。こいつらの言う通りにしとくか、しばらくは。
「じゃあこれからはラスボスになるために頑張るということで」
「「ファイトオー　ファイッ」」

：おまけ：

「いつも思うんですけどあの掛け声っていつの間に考えてたんですか？ちょっと前から使い出しましたけど」

「ちょっと前に考えました」

「いつだよ」

第6話

みなさんこんにちは、蓮山です。僕は今、日本上空にいます。
あ、窓の外で鳥型ガストレアが撃ち落とされた。　どうしてこうなったのでしょうか。

事の発端は先日、今後の方針がラスボスになろうと決まった結果博士たちが調子に乗りまして。
「ラストダンジョンはやっぱり天空の城だよね」
とか言いだし、ラ○ュタもどきを数時間で作り上げました。そうそう不老不死の薬も出来ました。
あの人たちといると常識というものを失いそうで怖いです。
それからというもの二人は、
「ここは無敵要塞～♪　雑魚キャラはお断り～♪」
などのわけのわからない歌を歌いながら城を強化しています。

うたのＣＤももらいました。五分ありました。怖いです。才能の無駄遣いがひどくて恐ろしいです。

まあ、それなりに充実した日々ではあるのですが。

「おーい、蓮山。ちょっと来てくれ」

あ、呼ばれていますね。それではまた。

ちょーおひさ。東音さんだよ！今日は刃姫ちゃんが面白い子を拾ってきたよ。

「あの博士この子って・・・」

「ああ、目が赤い・・・　ガストレアの因子持ちだ。もでるはなんだかわからん、と言いたいところだが予想はついてるんだ。ただ、そのとおりならすごいぞコイツは」

「それってどういうことですか？」

「まあ見てろ」

そう言うと刃姫ちゃんはアホ毛を動かし、

ズバッ

その子の腕を切った。

「ちょ、何してるんすか！」

「少し黙ってろ。面白いのはこれからだ」

「は、何言って・・・ッ!?」

ウニョウニョ

「え、」

グチャグチャ

「うわあ、」

ジャーン

「ウソだっ！増えたッ!?」

「そこはウソダドンドコドーンって言ってほしっかった」

「言ってる場合かッ！」

そう、なんとこの子切ると増えるのだ。そこから導き出される因子は・・・

「「モデルプラナリアとか、絶対死なねえ。てか無敵だろ」」

プラナリア：扁形動物門ウズムシ綱ウズムシ目ウズムシ亜目に属する動物の総称。

広義には、ウズムシ目（三岐腸目）に属する動物の総称。

体表に繊毛があり、この繊毛の運動によって渦ができることからウズムシと呼ばれる。

淡水、海水および湿気の高い陸上に生息する。

著しい再生能力を持つことから、再生研究のモデル生物として用いられる。

プラナリアの再生能力は著しく、前後に3つに切れば、頭部からは腹部以降が、尾部側からは頭部が、中央の断片からは前の切り口から頭部、後ろの切り口から尾部が再生される。

このような各部から残りの部分が正しい方向で再生されるのを極性があるといい、具体的には何らかの物質の濃度勾配ではないかとされている。生物学でプラナリアという場合、日本ではサンカクアタマウズムシ科ナミウズムシ属のナミウズムシであることが多い。

長々と説明したけど簡単に言うと　切ると増えるよ！　ということです。

面白いよねー。それにこの子の能力を使えば合法的に人体実験ができるんだよねー。

「ねえねえ、プーちゃん仲間に入れようよ！この子の能力があれば研究がいろいろ進むよ！」

「プーちゃん!?あんた早速名前つけたのか!?」

「ああ、私もそのつもりで連れてきたんだ。無限に増える実験体とかほっとけないだろ」

「「げへへへ　研究が進みますなー」」
「うわ・・・　悪だ、悪人がいる」
「「失礼な。マッドサイエンティストと呼んでもらおうか」」
　ふふふ、ホントいいよね。ダメにしてもすぐに新しいのが手に入るんだからさ、しかも減らないんだよ。
　これで、侵食率が上がらないイニシエーターという面白存在が作れるよ。
「「う、う～ん」」
「「あ、起きた、しかも増えたやつと一緒に」」
「「お、俺様は一体何をってここはどこだッ！」」
「「お、俺様ッ!?」」
　まさかロリボイスでそんなこと言い出すとは思わなかったよ。見た目も金髪碧眼美幼女だし。

第7話

［警告、危険です］

「ちっ、実験失敗か。グズグズの肉塊になっちまった」

「「「「「「「「「「「「うおぉォォォ!?五万九千三百七番目の俺様ぁぁぁぁッ!?」」」」」」」」」」」」

「クッ!こっちも実験失敗です。完全にガストレア化しました」

「「「「「「「「「「「「「「「ギャアアアァア!七千二十三番目の俺様ぁぁぁぁッ!」」」」」」」」」」」」」」」

「うわっ!こっちも実験失敗。完全に消滅した・・・」

「「「「「「「「「「「「「「「「「千八百六十五バァアァアァアンンンッッッ!!!」」」」」」」」」」」」」」」」」

「「「さっきからうッさいわッ!!黙って待ってろ!!」」」

「「「「「「「「「「「「ハァァッ!これから実験でどうなるかもわからない
不安の中黙ってろはひどくないかっ!この外道どもッ!」」」」」」」」」」」」

「あァッ!みじん切りにするぞゴラァッ!」

「「「「「「「「「「「「「ヒィッ!すいませんッ!調子こきましたッ!
反省しますぅッ!だからあれだけはッ

！」」」」」」」」」」」」」」」

くそう、この俺様をここまでビビらすとはやはりやつは只者じゃない。
そもそもあんなもん頭からはやしてる奴が人間なはずがない。
そもそもこんなことになったのはやつが俺様をここに連れてきたせいだ。
増えているところを後ろから殴るなんて卑怯なやつだ。
今俺様は『ガストレア因子の完全掌握実験』に付き合わされている。モルモットとして・・・
「ヘイプーちゃ～ん。次の子ｐｌｅａｓｅ」
「「「「「「くそう悪魔めッ！」」」」」」」
「俺様が行こう。みんな生きていたらまた会おう、達者でな・・・」
「「「「「「「五百五十五番・・・・・」」」」」」」
「よーし次は君だねー。だいじょうＶ。次は成功するから」
「そそそそそうか」
「うん、たぶんきっとメイビーおそらくね」
「すっっっっげぇ不安なんだけどっ!?　あ、ちょっおまっ　引っ張っ・・・・　あーれー」
ドナドナ～

「「「「「「「「「五百五十五番、お前のことは忘れんぞ」」」」」」」」

クッ!みんな奴らにやられていく、俺様はなにも・・・って

「おい、蓮山どこに連れてくやめろッ!ああああぁぁぁぁ・・・・」

ドナドナ～

「「「「「三百六十番ッ!」」」」

もう、終わりか。俺様はここで実験の失敗により死ぬんだ。はは、あっけない人生だったな。

「あ、成功した」

「まじすか、博士!　　　あっ」

「ほんとっ!刃姫ちゃん!　　　あっ」

おい、おまえらッ!今のやっちゃった感あふれる　あっ　はなんだっ!?おいおいまさか・・・

「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア」」

「「「「「「「「「うわあああッ!五百五十五バァァアンンンッッッ!!」」」」」」」」

「「「「「「「「「三百六十バァアアアアアンンンッッッ!!!」」」」」」」」」

第8話

ある日、精神と時のルーム（笑）に蓮山と束音が入ったと思ったら次の日。
「家族が増えたよ（ｃ・ω・´）」
「おいやめろ！」
なんか幼女が増えてた。えっ？よくわからないって？仕方がないあ…ありのまま今　起こった事を（ｒｙ
ま、そういうことだ。は？まだわからないと？しょうがないな言ってやろう。
「蓮山！」
「な、なんすか博士!?」
「ＤＴ卒業おめ！」
「あんたちょっとは自重しろッ！」
なんだよ、喜ばしいことじゃないか。だってあいつもう二十代後半だぜ？流石に心配だったから。
「あの、あなたが刃姫ちゃん博士ですか？」
「うん、ちゃんはいらないぞ」

「お母様から聞いています！すごい人だって！」
「ああ、ありがとう」
「特にアホ毛の一発芸が！」
「おーい、東音？何逃げようとしてるんだ？なに、少しＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＩするだけだ」
　アイツッ！純真無垢な子供に何吹き込んでくれちゃってるんだ！
「おい、廊下を走ったら危ないぞ。俺様のような子供に注意されるようでは・・・ってなぜ俺様のえりを掴む」
「くらえッ！刃姫ちゃん！プーちゃんボンバー☆」
「あまい、みじん切りだそんなもの」
「おい、いまき様なにげに俺様をモノ扱い・・・ってまてやめっ」
　目の前に投げられた障害物は即効撤去した。なんか悲鳴が聞こえたが気にしない。しかし、東音に逃げられた。
　まったくあいつは・・・　まあ、どうせ何時でも捕まえられる。気にしない。
　それよりもこの子だ。さっきからプー子を増殖させてるこの子に話を聞かなければ・・・というか、
「すまんそろそろプー子で遊ぶのはやめてくれ。なんかキモいくらいの人数になってる

から」
「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「いまさらだなオイっ！て言うか俺様でも把握しきれないって途中で増やすなッ！」」
「楽しい！アハハハ」
「「「「「「「「「「いや、こっちは楽しくないからッ!?」」」」」」」」」
　すごいなこの子。全く話を聞かない。さすがはあいつの娘。仕方がないな。コイツの親に聞くか。
「おい、蓮山この子なんだ？」
「えっとですね、まず僕と東音さんの娘というのはわかりますよね？」
「ああ、お前ら両思いなの知ってたしよく中庭とかでデートしてたもんな」
「「「「「「「「「「エエェッ！そうだったの!?てか中庭とか俺様初耳なんだけどッ!?」」」」」」」」
「うるさいぞ、さっさと一人になれ。話が進まん。それで？」
「・・・あ、はい。それでですね、まず事の発端はこの前の実験でして」
「俺様は許さないぞバカバカと俺様を殺しやがってッ！」
「はいはい、それで？」

「あの実験でガストレアウイルスの完全制御を可能にする遺伝子ができたじゃないですか」

本当に大変だったなあれは。暴走してガストレア化したり、自壊したり、弾け飛んだり、溶け出したりと。

一ヶ月不眠不休だったからな。まあ、そのおかげでガストレア化して戦うことができるようになったんだが。

その恩恵は本当にすごい。あれのおかげでガストレアに人の意識を蘇らせることができたからな。

それに人工的に因子を持つ子供を生み出すこともできるし、複合因子のイニシエーターは無敵に近かった。

あれだけの成果を出せたなら一ヶ月は無駄じゃなかったと思えるな。

「そしたら束音さんが・・・・なんすか博士、ニヤニヤして？」

「おまえ、あいつのこと名前で呼ぶようになったんだな？」

「ッ！べ、別にいいじゃないすかッ！は、話戻しますよ！」

ニヤニヤ

「そしたら先輩が「束音さん♪」ぐ、せ、せんぱ「束音さん♪♪」せ「束音さん♪♪♪」た、束音さんが・・・ああもうなんすかっ！ニヤニヤしてっ！話進めますからね！」

「ニヤニヤ（？・∀？・）」

第9話

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！
「俺様は東音と蓮山の娘だという幼女を見ていたと思ったら　いつのまにかティラノサウルスになっていた」
な…　何を言っているのか　わからねーと思うが
俺様も　何をされたのか　わからなかった…
頭がどうにかなりそうだった…　催眠術だとか超スピードだとか
そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を　味わったぜ…
「実はうちの娘モデルティラノの因子持ちでして」
「ほう、それはまたレアだな。人工か？」
「はい、東音さんが「恐竜こそ無敵だよー！」とか言いだしまして」
「あいつならいいそうだよな」
「はい」
ふ、ふんッ！俺様の超再生＆増殖の前ではやつも無りょ・・・

バクッ
「「「「アアッ!!二万六千番が食われたッ！逃げろっ！自切して逃げろッ！」」」」
ブチッ　ウネウネ　ジャーン
「「「「「ホッ　助かった」」」」
「お前ら、毎日が楽しそうだよなほんと」
「あ、この人美味しいですねー」
「おい、プー子。マジ逃げろ、チョー逃げろ」
「「「「イィィィヤァァァァッ!!!なんか気に入られてるぅッ！味をッ！」」」」」
助けてくれッ！誰でもいいッ！このままじゃ捕食されるッ！
ティラノから幼女の声が聞こえるのはアンバランスですごく怖いッ！
頼む誰か助けってくれッ！画面の前の君でもいいからァッ！
「「「「ヤバイっ！二十一番が錯乱してるッ！」」」」

ヤバイな、プー子が錯乱して第四の壁らしきものを認識してる。

まあ、やつはほっとこう。自分たちが何とかするだろう。
それよりも、
「蓮山、お前の娘強化する気満々だろ」
「よくわかりますね、流石です」
「どういうふうにするつもりだ？」
「なんか、無敵にするって言ってました」
ハァ・・・　体をいじられまくるってのは可哀想な気もするがやつなりの愛情表現だからな。
愛がなければヤツは存在の認識すらせん。
しかしなあ、あの子はまだ幼い。同年代と関わらせてコミニケーション能力を高めておかないとな。
プー子だけが同年代？の友人というのもな。しかも、捕食する側とされる側という歪な友情になりそうだし。
「「おい、念のため言っておくがそれは友情じゃないからな」」
「おまえ、思考にまでツッコミ入れるなよ」
「「顔を見れば何考えてるか大体分かるって・・・　減らすなよッ！何ナチュラルに捕食してんのッ！」

「ウマウマ」

「「「「「何がッ！もうお前ヤバいからねッ！血まみれで良い子に見せられない感じに・・ってすり潰すなっ！

やめろッ！ウワッ！ちょ、増える増えるッ！」」」」」」」」」」」」」

（。Ａ。）ヤメロ!!

仲いいなあいつら・・・　いや、仲悪いのか？まあ、見た感じは仲良さそうだし問題ないが・・・

外出た時とかにほかの子にもああしたらやばいな。

「おい、蓮山。少しあの子にはちゃんと注意しとけよ？」

「はい、わかってますよ。おーい美紅ー」

あ、あの子ミクっていうのか。文字はどうなんだろ？

後で聞いたんだよ。そしたら美紅だって。ぴったりだなって思ったよ。だってあの子、基本血濡れなんだもの。

「はい、何ですか？お父様」

「いいか美紅よく聞け？喰らっていいのはあの子だけだぞ？ほかの子はダメだぞ。わかったか？」

「はい！わかりましたお父様！」

「よしよし。美紅はいい子だなー」
「「「「いやッ！俺様も食べちゃダメだからッ!!」」」」
「諦めろ、餌」
「「「「「餌ッ!?今お前地味に俺様のこと餌扱いしなかったかッ!?」」」」
　何言ってんだこいつはいいじゃないか好きにさせてやれば。どうせ、
「無限に増えるお前ほどちょうどいい餌がこの世にあるか？」
「ひ、否定できない俺様がいるぜ・・・ッ！」
「「「「「あ、諦めるなッ！二百九十八番ッ！」」」」
　いや、諦めろよ。まあしかしやっぱりこんなやつとばかり遊んでいたら美紅ちゃんはがバカになってしまうな。
　せっかく頭のいい両親の間に生まれたのに。やはり子供を増やすべきか・・・
「「「「なあ、なんかすごくひどいこと言われた気がするんだが・・・」」」」」
「黙れ、金髪碧眼俺様増殖系ツッコミ幼女」
「「「「「増殖系ッ！何その新しすぎるジャンルッ！」」」」
「ツッコミ幼女は否定しないんですね」
「「「「「あ、それも違うからッ！」」」」」

第10話

わたしは悪い子だ。そして幸せになれない。

いつものように『呪われた子供たち』と呼ばれるわたしたちが集まって
暮らしている廃ビルに探してきた食べ物持って帰ってきた。そしてそこには、
――――――瓦礫と血の海しかなかった。
それを見たわたしが言ったのは、
「ああ、またか」
これだけだった。うすうす気づいていたのだ。
最近は幸せだ、何か嫌なことになってその分が帰ってくる、と。
だから納得だった。それに最近の食べ物はみんな奪ったり盗んだりしたものだ。
神様も起こっていたのだろう。だから全部、
『わたしが悪い』

そもそもこうなったのが一年か、二年くらい前だったと思う。目安になるものが無いのでよくわからない。

わたしは親に捨てられた。わたしの髪は白かったため親や医者がアルビノとか言う病気だと思っていたらしい。

しかし、成長すると頭の上に生まれつきなかったと思われていた耳の代わりとでも言うように狼のような耳が生えてきた。そして私の目が赤いのはガストレアウイルスのせいだと分かってしまった。

それからはひどかった。ひどい言葉を言われ、殴られ、捨てられた。その時までは幸せだった。

そうして街を歩いているとき、とある人に拾われた。

とても優しい人でいつもわたしに優しくしてくれた。何かお礼をしたかったけど何もできなかった。

だから出来ることで『お母さん』と呼んでみた。

そうしたとき嬉しそうな顔で笑いながら『お母さん』は泣いていた。

泣いていたけど、本当に嬉しそうだった。わたしも嬉しくて笑っていた。

　そして、幸せだと思ってしまった。
次の日、お使いから帰ると『お母さん』が撃たれた。よくわからなかった。
よくわからなかったけど、撃ったまずかった奴が言うにはわたしが悪いみたいだ。
わたしが悪いとわかっていい子になろうと思った。でも許せなかったから食べた。
まずかった。　　それもまた幸せになったあとだった。
そして今日、みんながいなくなった。
はじめは喧嘩もしたけどいつも一緒でみんなといると幸せだった。
すごく幸せで楽しくて、前のことを忘れていた。
わたしは幸せになんかなれないことを。
「おい、あそこにも化物がいるぞ！」
あ、見つかった。このまま私もみんなみたいになるのかな？
　幸せになれないのかな？
「おい！早く連れて来い！」
「待ってろ、すぐだから」
「なるべく早くな？いつ俺たちを襲うかわかったもんじゃないからな」
　引きずられていく。何か言っているのが聞こえる。
　人を襲う？そんなことしない。それに人を襲っているのはお前らの方だ。

もう限界だ。このまま終わりかな？
「すまんな、ちょっと待ってくれ」
「な、なんだテメェ!?」
大きな声じゃないのによく聞こえる声だった。
声の方向を見ると私より少し年上ぐらいの子がそこにいた。
「いや何、その子が私には必要でね？金を払うからこちらに渡してくれないか？」
「な、なに!?」
「言い値で払うぞ。今の世の中、金はあるだけいいものだろ？」
「し、しかし・・・・」
「・・・・・・・・」　「・・・・・・」　「・・・・・」
何か話している。途中から聞こえないけどわたしのことなのはわかる。
「よし、それじゃあ交渉成立だな。言い値もちょうど持ってる分と同じだ。受け取れ」
さっき来た子が大人の方に何か渡した。紙の束に見える。
「おお、ほんとにこんなに・・・」
「すげぇ・・」
「ほら、金はやった。さっさと失せろ。私を殺してもっとたくさんとかアホなこと考えるなよ？

手持ちはそれで終わりだからな。さっきその証拠も見せたろ？」
「ああ、わかってるさ。野郎ども　行くぞ！」
「「へーい」」
大人たちは去って行った。少し年上に見える子とわたしだけになった。
「ん？もしかして私を子供だと思っているだろ。君より少し上ぐらいの」
「・・・はい」
驚いた。考えていることがわかったらしい。それに、
「残念ながら私はもう三十後半だぞ。まあ、体は小さいがな」
どうやらおば「ん？」・・・ずっと年上のお姉さんらしい。
「それにしてもどうしてわたしのところに？」
「ああ、君たちのような『呪われた子供たち』を保護する活動を・・・これでは解りにくいか？
そうだな、簡単に言うと君が幸せになれる場所に連れて行ってあげよう、ということだ。
一緒に来てくれるよな？」
どうやらこの人は私を幸せにしてくれるというらしい。でもそれなら、
「それならお断りです」

「ッ！・・・なぜか聞いてもいいか？」
「いいですよ」
「そうか。ならどうしてか教えてくれないか？」
　この人はそんなことが気になるらしい。なら教えてあげよう。きっと聞いたらこの人もどこかへ行く。
「なぜならわたしは悪い子だからです」
「なぜそう思うんだ？」
「だっていつも幸せになると幸せにしてくれた人はいなくなるし、それはきっと神様が私に幸せになるなって言ってるからなんですよ？あと、わたしと仲良くなった人はみんな迷惑かけてますから」
「ほう、なら最後に君の名前は？」
「は？」
　何言い出すんでしょうか、この人は。そんなこと聞いても意味ないのに。
「いや、なに。君のことを覚えてこうと思ってね」
「はあ、ご苦労なことですね。まあ、そう言うなら教えますよ。わたし、「たえ」といいます」
「なるほど、たえちゃんか・・・」

「はい」
「なあ、たえちゃん」
「はい？」
　なんですかこの人は。まだ何かあるというのですか。いいかげんして欲しいです。
「君の答えは聞いてないんだよ」
「うわっ!?　ちょっとッ！はなしッ!?」
　急に持ち上げられました！どこ連れてくんですか！
「安心してくれ。私やこれから出会う君のお友達になる子達はいなくなったりしないさ。
　それに、これから君が行くところはみんな家族みたいな感じだし来るもの拒まずだからすぐ馴染めるよ」
「・・・・」
　言ってることは半分くらいしかわからなかったけどこの人のところなら大丈夫な気がしました。
　優しさが伝わってきたとか、力持ちで頼もしい感じだったとかじゃなくて、
　ただ、温かかったから。　この人のところでならうまくやっていけそうです。

乗り物に乗せられたあと建物について私ぐらいの子供がいるところに案内された。
ちなみにここまで連れてきてくれた人のことは博士と呼ぶようにとその人から言われた。
「うわっ！背後から俺様を喰らおうとするとはな！美紅！」
「良いでしょう？お願いします。先っちょだけにしますから」
「ほんとに先っちょだけだな？」
「はい、先っちょだけにします」
なんか入口のあたりで仲良さそうにしてる子達がいます。
私もあんなふうに気軽に話せるようになるでしょうか？
「・・・・・おい」
「はい？なんですか」
「俺様は先っちょだけにするなら食べていいといったはずだが？なぜ、俺様は頭だけになっているんだ？」
「先っちょだけにしましたでしょう？」
「俺様を先っちょだけにするって意味だったのかッ!?」

「はい♪」
ほんとに仲良さそうですね。邪魔するようで悪いですけど挨拶しないと。
友達になる時ははじめが肝心ですから。
「あの、」
「はい？」
「ヒッ!?」
なんでこの子血まみれなんですか！後ろからじゃわからなかったけど口のあたりからずっと真っ赤ですッ！
「あっ　もしかして新しい子ですか！私、美紅って言います。よろしくお願いします」
「は、はい・・・　よろしくです」
よ、よかった。見た目だけですごくいい子みたいだ。
そうだよ、きっと絵の具か何かがはねちゃって赤いだけだよ。
そう考えると明らかにはねすぎだけどきっとあってると思う。
それよりももうひとりの子にもあいさ・・・
「ん、何だ？　新入りか？」
「キャアアアアアアアッ!!!　生首イィィィ！　しかも喋ってるッ！」
「「あ、やっちゃったぽい」」

・・・・うまくやっていけると思ったのはわたしの勘違いだったのでしょうか？

正直もう自信ないです。

第11話

ここに来て一年ぐらいたった。
最初はなれるか心配だったけどここは泊りで朝から夜まで毎日一緒にいるからすぐに仲良くなれた。
それから親友もできた。同じ部屋の月子ちゃんだ。月子ちゃんはすごく強くていつもわたしのことを守ってくれている。地上の外周区でガストレアに襲われた時にそれを倒したオラオラは凄かった。
ほかの子たちともよく遊ぶので今の生活はすごく・・
「「「ギャァァァァァァァァァァァッ!!!」」」
「あッ!プー子ちゃんがまた喰らわれてるッ!」
「ちょっ!血の海なんだけどッ!」
「コラ!夕飯前に食べちゃダメでしょ!美紅ちゃん!」
「「「「「「えっ!怒るとこそこっ!」」」」」」（みんな）
・・・・賑やかですねー（棒）え?心配しないのかですか?
そんなのもう慣れて心配どころか驚くことすらできなくなりました。

慣れって怖いですね。前に目の前でかじられてましたけど全く驚きませんでしたもん。

最近血の匂いにも慣れて美紅ちゃんと普通にお話できるようにもなりましたもん。

最初はすごくきついですよ?だってあの子いつも血まみれで鉄臭いですから。

「お～い。たえちゃーん」

「はーい。ちょっと待ってて月子ちゃん」

月子ちゃんも呼んでるし日記はこれくらいにして森へ散歩に行きますか。

森についたあと博士のマシンで久しぶりに地上に降りました。

相変わらずしらけたところですが懐かしくも感じます。

「ッ!おいあいつら・・」

「なッ!化物どもじゃねえか!」

「人間に化けて嫌がるんだッ!」

ああ、そういえばここにはこういう人たちもいましたね。

まあ、耳と尻尾を出したままのわたしも翼を出してる月子ちゃんも悪いと思いますけど。

馬鹿ですね、あの人たち。わたしたちは普通じゃない子達の中でも普通じゃないの

に。
「おらァ！くらえぇ！」
なるほど、金属バットですかしかし近づいているのが月子ちゃんにバレていると、
「ただの人間ごときが何見下してんだか・・・　恐れ敬いなさいよ！
オラオラオラオラオラオラオラオラァ！」
はい、死んだ。やはり月子ちゃんのオラオラはスターランクのプラチナ級です。
「月子ちゃん、流石です」
「ありがと、でもたかが人間。私たちの同類に守ってもらってる分際で
私たちを化物とか言ってしたに見てる雑魚よ。正直今ので五十人まとめてやったこと褒められてもね」
「ですがいまのオラオラだけで五十人屠るのはさすがとしか言えませんよ」
ほんとに月子ちゃんはすごい。わたしも頑張ってとなりで戦えるようにならないと。
「ちょっと、たえちゃん？行くわよ」
「あっちょっと待ってくださいよ。まったく月子ちゃんはせっかちなんだから」
そういえば今日は空中庭園都市では作れないものを買いに来たんでした。
それにしても・・・
「な、なんなんだあいつらは・・・ッ！」

あの人は誰でしょうか。

番外編1

：驚愕：

どうもみんな！東音さんだよ！やっと出番だＺＥ。

そんなことより久しぶりにやることがないよ！だから今日は施設内を散歩する・・・・

「ねえねえ。モブ美ちゃんはジブリンスタジオの映画見た？」

「ああ、あれ？見たよ『天空城のラーピタ』。おもしろかったよね」

「うんうん！特にラストとかすごいよね！ムカチャッカ大佐の「目がぁぁ～」はバカウケだった」

・・・・・えっ？

：また驚愕：

「ってことがあったんだよ」

わたしはさっき散歩中に聞いた話を刃姫ちゃんにした。

ほんとに謎だよね。ジ○リ作品はこの世界にないし、しかもパチモンくさい名前だったし。

「ああ、それ作ったの私だ」

・・・・・・・・・・・・・えっ？

：それは：

「試しに見てくれ。子供たちの評判はいいが大人の感想も欲しいからな」

って言われてブルーレイ渡されたけど話知ってるしそんなに面白くないと・・・・

『私はあの城に帰らなくちゃいけないの』

『そ、そんな・・　天空城が実在するなんて・・・』

話が違うッ!?えっ!なにこれ!こんなの知らない。

て言うか何勝手にアレンジしちゃってるの刃姫ちゃんッ!?

なんだよちくしょう見てやろうじゃねーかこのやろう。どうせそんなに面白くは・・・

『どうしてあなたは地上の人間を信じられるの？』

『信じるとか信じないじゃない。ただ俺は知っているからさ』

面白くなんか・・・・

『さあ、王女よ。その天空城を私てもらおうか。その城は地上の支配に必要でね』

『この城は、みんなの思いが詰まったこの城はあなたなんかに渡さない！』

面白く・・・・・

『これでお前は終わりだッ！』
『馬鹿な・・・・ッ!?この城はそんなものではないはずッ！』
面白いッ！え、ナニコレめちゃくちゃ面白いんですけど。
そして、
『お前だけは許さないぞ！ムカチャッカ大佐！』
たまに飛び出すネタでつい笑ってしまうッ！
『激おこスティックファイナリアリティぷんぷんドリーム』
バ○スが!?おこっている！

：その後：
「刃姫ちゃ～ん　見終わったよ～」
「ほう。で、どうだった?」
見終わったので刃姫ちゃんに返しに来た。
そしたら、感想を聞かれた。キラキラした期待するような目で。
だから、
「面白かったよ。ただ一つだけじゃ何とも言えないかな～」
って言ったら

「まあ、だろうな。そしたらほかのも見て感想聞かせてくれ」
どっさり束で渡された。
おまっどんだけッ!?

：そしてやっぱりと意外な才能：
ダダダダダダダダダッ
いまわたしは刃姫ちゃんの部屋に向かってダッシュで向かっている。
どうしても伝えたいことがあった。
ガチャッ
「おう、見終わったのか。それじゃあ感想を・・・」
「この天才監督めッ！」
全部メチャクチャ面白かった。刃姫ちゃんの意外な才能が見つかった。

第13話

吾輩は転生者である。名前はまだ無い。・・・・なんてね☆

ハローみんな。俺は転生者、名無《ナナシ》だ。前世では女性関係でひどい目にあったので、

『素敵な出会い』を転生特典にしてもらった・・・・のだが！

「ん～　これだけじゃやってけないよ君。戦闘スキルもつけとくね」

と、言われ　気がつけばブラックブレットの世界に！

しかし！戦闘スキルは強かった！　というわけで普通に生きてます。

そしてついに！　つ！い！に！

素敵な出会い、というか天使を見つけましたッ！

それはいつものように外周区に散歩に出かけたときのこと。

子供のような純粋な雰囲気でありながら呪われた子供たちに

母のような慈愛に満ちた笑顔で接し、保護している女性？（少女？）に出会ったのだ！

ついに見つけた！愛しのＭｙ　Ａｎｇｅｌ！

「はぁ・・・　会いたい・・・」
「おまえどうした？おとといからずっとそんな感じだぞ？」
　ああ、そういえば今は学校だったな。今は大学生だが前世では留学までした身、正直余裕だ。
「フッ　俺はついにであったのさ・・・　Ｍｙ　Ａｎｇｅｌに・・・」
「すまん。いつもに増してわけがわからん」
「いいさ、理解してもらえるはずがないのさ。この気持ちはナアアアアアアアアアアッ!!!!
　■■■■■■■■■!!!!」
「うわ、バグった？おーい戻ってこーい」
　くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ；@：「ｚｘｄｃｆｖｇｂｈんｊｍｋ、ｌ。；・：？」・・・・・ッ!?
　ハッ！俺は一体何を・・・
　まあいいや、今日もどうせ散歩道にはいないだろう。気分転換にどこかに出かけるか・・・
「なあ、久しぶりにどこか出かけようぜ」
「よしきた。いつも通り負けた方のおごりな」

「「せーの！　ジャンケンポン！」」

負けた。今日一日で財布が軽い。不思議だ・・・体まで軽いよ？パ○ラッシュ・・・

「おいッ!?　口から魂的なのでてるぞ!?」　ベシッ

「ぐふ」

ゞ（〃。ω。）ノタダィマ☆　（。（Д）。＼）おかえり！

ハッ！

「叩いてくれたおかげで魂が体に帰ってきた。礼を言う。マジデタスカッタ（泣＆怒）」

「す、すまん。まさか財布がピンチって知らなくて・・・」

ほんとひどいぜ。なんやねん、残金十円って。

う○い棒くらいしか・・・って消費税で買えんし・・・

まったく・・・なんて日だッ!!!

「あ、おいあそこ見ろよ」

「ん？人が集まってる？」

そこでは呪われた子供たちらしきヤツが大人たちに殴られ蹴られていた。
「この化物めッ！人間様に化けやがってッ！殺してやる・・・」
「こんなやつさっさと殺っちまおうぜ。害にしか無いんだから」
「人間のフリして襲う気なんだ！気をつけろ！殺っちまえ！」
最悪だな。彼女たちには喋らせず自分たちが正しいと思って好き放題言ってやがる。
助けるか？しかし、ツレが仲間と思われ攻撃されるのもマズイ。
しばらくはあの子達のの回復力も持ちそうだし奴らの隙を作って逃がすのが一番か。
それなら「おい！」ッ！
「そこの青年たち邪魔だ。どけ」
この声はッ！
「私はあいつらの保護という重要な用事があるんだ」
一緒にいた友人が何か言い返しているようだがもう聞こえない。
「憐れむだけの偽善者に用はないぞ？そこの君の友人のほうは助けるつもりだったみたいだがな」
何か友人が驚いているようだがそれも気にならない。
興奮を抑え、俺はゆっくりと振り向く。そこにいたのは・・・

「すまないがほんとに邪魔だ。早急にどいてくれ」

我が愛しの人だった・・・・

まったく今日はなんて日だッ!!!

第14話

「あーもー！邪魔だ！どけ！」
ボーッとしている間にあの人は殴られ蹴られている呪われた子供たちに近づいていった。
俺も行きたいのだが場違いな気がするため今は動かない。
「そこで子供を殴ってる猿ども。そこまでにして何処か行け、邪魔だ」
勇気ある一言というより挑発しまくりの一言には脱帽です。
それに奴らを見下した感じの微笑み、それもまた美しい！
「アアッ！何だい嬢ちゃん、こいつらの味方するってなら容赦しねーぞ」
「じょ、嬢ちゃんッ!?」
嬢ちゃん扱いされてブチギレているのがここからでもわかる。
確かにマイエンジェルは少女に見えるかもしれんが雰囲気（オーラ）が完全に大人だし、
修羅場をくぐり抜けた歴戦の戦士の纏うそれに近い。あんな子供いたら見てみたいんだが・・・

「ハッハッハ・・・　よくわかった。要するに死にたいわけだ。ならば死ね」
ビュンッ
そんな音がした瞬間、少女たちを害していた馬鹿どもは跡形もなく消えた。
何か刃物のような光の反射は見えたがそれ以外は何もわからなかった。恐ろしい速度だ。
戦闘能力チートの俺に知覚させないなんて・・・
「さて君たちには私とともに来てもらう。安住の地を提供するのだ、ありがたく思って付いて来い」
思いやりや優しさなど皆無に聞こえる言葉だがそれはあの包み込むような微笑みで打ち消され、
不思議な安心感を纏わせている。彼女の近くいた子はまるで不安というものを失ったかように涙を流している。
きっと気づいていないだろう。あれが天使やら女神やら俺が言う理由。
近くのものを幸福に指せる微笑み。彼女以外に俺が愛することのできる女性がいるだろうか。いやいない。
これこそが神が与えてくれた『素敵な出会い』！
俺は今、あなたのもとへ・・・って！いねえッ!?

「ハア・・ハア・・・　やっと追いついた」
「ん？」
不思議そうに振り返る彼女。いやマイエンジェル。いや女神さま。
そしてそれに伴い振り向く子供達。いつの間にか増えてる。俺・・・これから告るんだよな？
なんか・・・本人以外に二十数名ほど見てるんでってあっ！
移動用の飛行機らしき近未来デザインの乗り物からも十人近く見てる！ハッズッ！
仕方ないやるっきゃない！
「一目見たとき、あなたに惚れました。もうほかの女性は愛せません。
結婚を前提にお付き合いしてください。お願いしますッ！」
「えっ？・・・・・・・・・・・・ッ!?・・・・えッ!!え？嘘!?エッ！なんでっ!?」
・・・・驚きすぎな気がします。でも、先ほどの落ち着いた雰囲気ではない、
おろおろしながら初体験に戸惑う初心な少女のような落ち着きのない感じは・・・・・
すごく可愛い！十倍惚れたッ！
「なぜって言われても・・・ドストライクだから？」

「だ、だからって・・・まさかロリコン！悪いが多分年上だ！」
なんかロリコン扱いされた。確かに見た目は小学校高学年、良くて中学一年って感じだがそうじゃない。
なんか子供たちを守ろうとしてるが気にしないで誤解を解く！
だからそんな養豚場の豚を見る目で見ないで！あなたにされると目覚めそうです！
「そうではありません！最初に見たときあなたは子供たちの保護をしていました。
そのときの顔は今でも忘れられません。聖母のような慈愛に満ちた包み込むような微笑み！
俺はただ見惚れるだけだった・・・　それから！ずっと纏うあなたの雰囲気は！
安心を周りの子供達に与えていた。いい大人のいや、まるで母のようなものだった！
そしてときには妖艶な笑みを浮かべ、あるときは無垢な少女のような笑顔で！
そして先ほどの照れた顔！萌え死ぬかと思いました！てか川の向こうに祖父がいた！
それから・・・・・・・・・・・」
それから俺は彼女の魅力を、どこに惚れたのかを十分ほど語った。
数字二つ分動いたのは時計の短い針なのは気のせい。十分しか語ってない！
俺が何か褒めるたびに同意の頷きを繰り返していた子供たちがすごく印象的だった。

そして彼女は、

「あ・・・う・・・うぅ・・・ば、バカ・・・」

顔を真っ赤にしてもじもじしながら力のない声で俺を罵ってきた。

「「「「ぐはっ」」」」

俺と子供達数名が萌え死んだ。ダイイングメッセージは『最強は萌え』。

ああ、花から愛が溢れ出す。最後に見えた彼女の困ったような戸惑うような焦り顔のせいで・・・

俺の萌えは加速した！

「二万・・・十万・・百万！馬鹿なッ！まだ上がるだとッ!?」

バーンッ

「くっ」

「誰だ！ひとりでスカウターゴッコしてるの！」

ああ、涙目で力のない怒った顔は俺の萌えのブレーキを破壊した。愛が！止まらない！

血まみれでカメラのシャッターを切る子がいる、血で地面に萌と書き続ける子もいる。

理解ある子供とは・・・彼女たちとはいいジュースが飲めそうだ。

ああ、やめてくれ女神よ。まみダメ上目遣いなんてッ！人類には早すぎる！

今日はなんて日だッ!!!

第15話

「知らない天井だ・・・」
　やべぇ、言えた。
　それはさて置き俺はどこに?こんな近未来チックな天井知らない。宇宙戦艦かな?
「あ、目覚めた?」
「誰だ?」
　マジで怖い。逆さ釣りで蜘蛛の巣模様の全身タイツは怖い。
　俺はいつの間に世界を移動したんだ・・・　よりによってマー○ルかよ・・・
「あ、博士。僕は戻りますね。あとはよろしくです」
「ああ、わかった」
　おい、天井這うな怖い、って女神の声が聞こえる!
「えっと、その大丈夫か?急に倒れるから驚いて連れてきてしまったんだが・・・」
「あなたと一緒ならもう何も怖くない」
「フラグを立てるな。やめろ」
　怒られてしまった。しかしそれはご褒美。まあ、それは置いといて。

現在地確認。彼女なら何か知っているだろう。
「そのぉ女神、ここはどこでしょう? 教えていただけないでしょうか?」
「女神をやめろ。私には刃姫という名前がある。ちなみに今君がいるのは空中庭園の中の病院だ」
「なるほど、わかりません」
空中庭園って何? おかしいな、科学はそこまで発展していないはずだったのに・・・そうか!
「自分は何百年ほど眠ってたんですか?」
「いや、ほんの数十分だから。流石に死ぬって」
おかしいな。俺の知る科学力より数世紀進んでる。でも、窓の外の雲はしたにあるんだよなー。
「それでとりあえず、さっきの返事なんだが・・・」
「もしかして告白の返事が聞けるんですか!」
「まあ、早めに済ませたいし」
願ったり叶ったりです! 俺は大人だ。振られても泣かない、ちょと後ろで見守るだけ。
だからお願い! イエスと言って!

「まずは実験動物と研究者の関係からでお願いします」
「ｗｈｙ！」
　予想していたまずは知人からを斜め上に天元突破していった。
　なにゆえ？理解不能とはまさにこのこと。アンビリーバボー、シンジラレナ～イ。
「なにゆえそのようなことに？」
「知り合いのカップルがそうだし、それで結婚まで行ったし。あと、君の体に興味がある」
「・・・・なぜ？」
　まず、是非ともその知り合いを紹介して欲しい。話し合いが必要だから。
　そして、いろいろすっ飛ばして体ですか？
「いや、だってな？君の体はそもそも常人とは造りが違う。基本的に戦闘用なんだ。
　筋肉の構造から説明しよう。君の筋肉は・・・・

～一時間後～

「そして細胞は戦闘センスをより引き出すために・・・

〜三十分後〜

「という訳だ。わかってくれたか？君の体を研究すれば無敵超人を生み出すことも可能ということなんだ。
だからこそ私は・・・・

〜一時間後〜

「わかったかッ！」
「無理ですッ！」
興奮から顔を赤くしながら近づいてくるのは萌える。でも語っているのは俺の体がどれほど研究に役立つか。
解剖されそうで怖い。てか既に解剖済みなのかもしれない・・・
「あの、解剖とかしてませんよね？」
「ああ、してない。私に・・・その・・・好意を抱いてくれてるわけだし・・
ひどい扱いはできないというか／／／／」

うわ可愛い。そんな顔しないで欲しい。萌え苦しむ。
「大丈夫、腕をねじ切るのは解剖に入らない（ボソッ」
ん？何か言ったかな？それよりも聞かなくちゃいけないことはたくさんあるんだ。
じゃないと安心して刃姫たんを愛でられない。
「それで俺は結局どうなるので？」
「・・・なにか良くないことを考えられた気がする。
とりあえず強くなってもらって現場で経験積んで掃除に行ってもらうことになると思う。
ま、頑張ってくれ。私は仕事があるからあまり見に行けないと思うが頑張ってくれ」
「わかりました！頑張ります！」
デンワダヨ！デンワダヨ！
「・・・可愛い着信音ですね。いいと思います、ロリボイス」
「・・・仕事の電話だ。少し席を外す。おとなしく待っててくれ」
そう言ってはなれていった刃姫たん。なんかすぐそこで話してる気が
「影胤君か。ああ、問題ないさ。物は予定どうりに届けさせるよ。ん？
小比奈ちゃんの様子かい？元気いっぱいさ。今日も血濡れ姫と一緒に増殖バカで遊んでるんじゃないか？

わかってるさ。ここは託児所も兼ねた研究施設だぞ？親御さんが心配になるような教育はしないさ」

なんか・・・すごい名前が聞こえたきがする。具体的には一巻のラスボス的な。

俺、もしかしなくてもすごい人に惚れた？

全く今日はなんて日だ・・・ハァ

第16話

俺、名無しは刃姫たんのところで修行を積んだ結果。

ギシャアアアアアアアア

「うっさいわ」

一二三、はい

ボガンッ

ガストレアを三回のパンチで倒せるサンパンマンになっていた。

きっと師匠がキチガイなんだ。だってあのじいさん、デコピンでガストレア倒すし。

そして俺は今、地上の外周区にいる。最後の課題だ。はっきり言う。

「イージーすぎてクソゲー」

俺はガチでジンガイさんに仲間入りしたらしい。

しかし！これをクリアすれば俺にも相棒、つまりイニシエーターが与えられてついに民警になれるのだ。

最高だぜ！さらにサラミ！なんと刃姫たんが遊園地デートをしてくれるというのだ！

うっほほーい！これであと百年は戦える。

とくに先生こと東音さんとその夫の先輩こと蓮山さんにおすすめされたお化け屋敷。

なんでも刃姫たんがめちゃくそ可愛くなるらしい。曰く、

「同性でも惚れる」

「お持ち帰りしたくなる」

らしい。

ああ、今から楽しみだ。ささっと終わらせて帰りたいな。

そういえば俺の周りのガストレアの死骸が増えて・・・

なるほど。さすが俺、既に終わらせているのか。あ、やりたいことができた。

「ぬおー、体が勝手にー」

楽しす。

ついに民警になり、相棒もでき、デートは・・・超絶萌えた。

そんな今日はなんでもこの空中庭園城に出資してくれているお得意様に俺を紹介す

るらしい。
しかし、その服装がビシッを超えてキリッって感じ。
というかなんていうんだろ？タキシード？みたいなのだ。
「なあ、誰に会うんだ？刃姫たんは教えてくれないし、
お前だけが頼りってかお前が緊張するほどって何もんよ。教えてプー子」
「プー子言うな。というか知らないなら仕方ないが、
原作キャラですごく地位の高い人って言ったらわかるだろ？というか、刃姫たんって・・・
博士をからかうのやめろよ。あの人ほんとそういう耐性ないから。俺様を萌苦しませる萌えキャラだぞ」
・・・・なんだろう、未だにプー子のキャラがわからない。いや、俺も人のこと言えんけどさ。
なあ、プー子よ。これからさ、会う人がさ、もしもさ、予想どうりならさ、俺さ、やばいんだよ？
というかさ、今さ、気づいたんだけどさ、案内してくれてる人さ、見覚えが・・・
「それで、菊之丞さん。俺様たちは聖天子様に何を言えばいいんだ？何度かあのお方も修行風景は見てるし、

特に自己紹介は不要だろう?俺様なんかあんたと会話できるほどの中になってるんだし」
やっぱりだったァァァー!イヤや!俺、城に帰る!統治者との会談とか無理や!
ニポンジンハケンリョクニヨワ〜イ。俺、ニポンジン。ケンリョクニヨワーイ。
オーダブリューエーティーエー　オワタオワタ＼（^ o^）／
「聖天子様、世界樹の新人民警をお連れしました」
「お入りください」
待ってこ、こここここここけーこっこじゃなくて、心のジュンジュワー違う!心の準備ガガガ文庫!
「落ち着け!!落ち着けナナシ!顔が福笑いみたいになってるぞ!?
菊之丞さんの顔を青くさせる顔芸は半端ないぞおい!帰ってこーい!」
アビブバブバブアバラボー。ハッ!俺は何を・・・
「コヤツは大丈夫なのか?」
「戦闘ではすごく役に立つんだがな・・・　どうも、権力に弱いらしい。
迷惑かけるかもしれない。すまんな、菊之丞さん」
「いや、お主が謝ることでは無い」
緊張ＭＡＸ!ヒャッハァー最高にナシってやつだぜェー。

ういっしゅ！ラリルレロラリルレロ！アジャパー！
俺の頭はグルグルドッカーン」
「途中から声に出てるぞ!?今日ホントどうした!?」
「しぇしぇしぇのぉ～・・・シュェェェェ！」
「・・・すまん、私は先に行く」
「待ってくれ菊之丞さん！俺様を置いていくな！今のこいつと二人にしないでくれ！」
「ハッハァ　なんて日だァッ！」
「お前のせいでな！」
「今朝俺は美紅美紅ジュースを飲んだ・・・　フゥウウウウウー！」
「あれ、麻薬だぞ!?」

番外2

「遊園地デートの約束でしたよね！行きましょう！すぐ行きましょう！」
「待ってくれ、準備がまだ・・・」
最終試験を突破したご褒美に刃姫たんとデート出来ることになった。
しかも遊園地！これは最高だ！　あれ？そういえば・・・
「遊園地なんてどこにあるんですか？」
「おまえ、知らないで言ってたのか・・・」
この空中庭園城で見たことはないし、地上は廃墟同然。
遊園地なんて何処にもないはずなんだけど・・・
「ハァ、まず空中庭園城『世界樹』の周辺に浮かばせたプレートのことを教えるぞ。
まあ、用途に合わせた土地だな。その中の一つに『アミューズメントプレート』があり、
そこに遊園地などの娯楽施設がある。今日はそこに行くわけだ。
暇なときに全てのプレートを案内してやるから楽しみにしておけ」
「なるほど、デートのお誘いですね。了解です」

「で、デートなわけないだろ！・・・ばか／／／／」
かあいい。萌える。美少女の赤面顔は宝に値する。
「その、とりあえず着替えてくるから待っててくれ。さすがの私も白衣で遊園地は嫌だ」
それから十分。
「ううぅ～／／／　私にスカートは似合わないのに。束音のやつ帰ったらみじん切りだ・・」
すごく可愛い格好で現れた。普段はジーンズなのにチェック柄のスカート。
若干赤い悪魔を思わせるセーターは彼女が着ることで見た目の幼さの中に消えていた大人の雰囲気を出している。
上着のジャケットで活発さを出しつつ、革靴にすることで上品さを出している。
きっと束音さんがコーディネートしたのだろう。帰ったらお礼に写真をたくさん渡そう。
「そ、その・・女っぽい服は似合わないと思うんだが、に・・似合うかな／／／」
「ごちそうさまでーす！刃姫たん、まじカワユス」
「かわっ！／／／　お、お世辞なんか言われたって嬉しくなんかないんだからな！／／／」

可愛いなーもう！お持ち帰りしたい！しかしこれから遊園地だ。写真撮りまくってコレクションを増やそう。

というわけで、

「刃姫たん、こっちむいてー」

パシャッ

「たん付するのはやめろって何回も――――フワッ！」

「はい、いい絵いただきましたー」

「なっ・・・ううぅ／／／　は、早く行くぞ／／／」

かわいいなぁ。まあ、遊園地に着けばコレクションは増える。だから今は我慢。

遊園地につきました。『ディスニーランド』って言うんだ。え？『シー』もある？へぇー。

あっ、マスコットキャラクター。『クッキーマウス』って言うんだ。へぇー

「その、なんだ。まあ、名前は気にするな。それにあそこと違って入場料は安いし食べ物も飲み物も安い。

さらにあそこと同じで乗り物に料金はかからないし、お土産も良心的な値段だ。

そのうえ、サービスはあそこ以上でスタッフは美男美女しかいない。はっきり言って

マジの夢の国だ」
「ぱねぇ。ただただぱねぇ」
そんなこんなでデートが始まります。超イイねサイコー

番外3

「刃姫たんと遊園地デートということでテンションマックスで調子こいてたら初っ端からえらい目にあった」

まさかあんなになるとは思わなかった。名無くんは驚愕しているぞ。

あと刃姫たんに萌えすぎて早くも体調を崩しそう。

とりあえずみんなも何があったか気になるだろうから振り返ろう。

遊園地といえばジェットコースター！一部の人からは拷問との呼び声も高いジェットコースター！

運がよければ俺のようになるぜ！

「ギャアアアアアッ!!目に鼻血がアアアアッ！」

「うぅぅ・・・　下着見られたぁ・・／／／／」

なっ！やばいだろう！詳しく振り返るとこんなかんじだ。

「ジェットコースターとか久しぶりに乗りますよ俺」

てか存在したんだねこの世界に。
「ああ、そうだな。ところで名無は絶叫系平気なのか？」
「はい。先日紐なしバンジーを体験したので」
「あ、あれは謝っただろ！」
あれはヤバかった。刃姫たんてば行ってこーいって軽く送るから油断してたけどこのこぱらしゅーとくれなかったんですよ。死ぬかと思いました。
キイィィ
おっと動き始めた。久しぶりどころか十年以上乗っていなかったから楽しみだ。
「そういえば私、スカートなんだが大丈夫か？」
バッ！
勢いよくスカートの方に視線を向けてガン見していた俺は悪くないと思う。
これは刃姫たんがかわいいのがいけない。
そして――――
ビュンッ
ジェットコースターは下りに入り、
「キャッ！」
刃姫たんのスカートの裾が舞い上がった。

キャッてずるい！萌えるわ！てかその身長と見た目で黒のヒモすかッ!?

ブシッ

当然俺の鼻から愛が溢れ出るわけで。しかしこの時の俺は鼻から愛が1程度にしか考えてなかった。

・・・・落ちてるのにな。

そして最初の状態に戻るというわけさ。

「目が痛いぜよ」

「お、お前が人の・・・その、し、下着を／／／／　が、ガン見してたんだから自業自得なんだからな！」

ふんっ

そんな顔しないでくれ、萌えるから。・・・この人、年上なんだよな？納得いかないけど。

刃姫たんに年齢詐称疑惑が。この人年下と言われた方が納得できるよ。だってさ、そうだろ？

「ううぅ〜／／／／」

ぱんつ見、ゲフンゲフン　ちょっとしたハプニングで顔真っ赤にしてうなってるんだじぇ。

おっとまた鼻から愛が。

「よし！早く次のアトラクションに行きゅじょ！　はぅっ／／／／」

かぁぁぁぁわぁぁぁぁぁいいいいいいいいいい！

落ち着けたつもりだったけどまだ落ちくけて無くてかんじゃったんだね！はぅっだって！かぁいい！

お持ち帰りするほどの体力残ってないけど！血が足りない！

「は、早く次行くぞ・・・」

うわぁ！落ち込んでるのに可愛い！

萌えるのはこのくらいにしておくか。次だ次！写真はたっぷり撮ったから。

番外４

遊園地といえばお化け屋敷だよね？それにおすすめされちゃったんだよ、かわいい刃姫たんが見れるって。

というわけでお化け屋敷に向かっています。刃姫たんに内緒で！行ったどうなっちゃうんでしょうか。

「なあ、一体どこに向かってるんだ？」

「もう少しだから待ってくださいよ。あ、見えましたよ、　　お化け屋敷」

「えっ？あっ」

ギュッ

ああ、腕に抱きつかれた・・・刃姫たんやっぱ胸デカイわ。めっちゃ柔らか天国。

「ほ、本当にあ、あそこじゃなきゃダメか？ほ、他にもアトラクションはあ、あるぞ？」

うるうる

な、涙目上目遣いいただきました！こうかはばっバーロー！

あ、あっぶねー。危うく他のとこ行くとこだったぜ。クッこれが女の武器の力か！

（勘違い）

可哀想、確かに可愛そうだけど！ここは心を鬼にして、
「でも、遊園地といえばお化け屋敷ですから行かないわけには行きません！」
「うう、　やー」うるうる
なっ！なんか幼くなてる。でゆこと？りきゃいがおいつかのい。
「お願いぃー　お化け怖いのぉ」うるうる
「グハァッ！」
な、なんあんですかこのくぁいすぎて浄化されそうになるぅぅぅ！ヤメテ！袖を涙目で引っ張らないで！
駄々こねるみたいなしゃべりをヤメテ！おにーさん浄化され・・・あんた年上やろっ!?
「グスッ　わがった、ガマンする。　だからねぇ、お願い。　手、離さないでくれる？」
「ッ!?」
ちきしょうこの人もう何かすごい。なんか急にまるで離れるのが寂しい幼馴染みたいなこと言いだして！
さっきまでロリってたじゃん！クソー、この人これで素だからなぁ・・・演技ゼロでこれはね。
この人、人を萌えさせるために生まれてきたんじゃないか？

「それじゃあ、気合入れていきましょうよ」
「う、うん」
・・・幼馴染の彼女とかってこんなかんじかなぁ?あ、すごいギュってされてる。
この人、自分のサイズ感わかってるのかな?すごい密着してるから手の先にプニっとした太ももとか、
柔らか天国なお胸がジャストミートしてるんですけどってッ!?
「んっ!」
・・・・・・今あたたのってあれですよね?
「こ、こんなところで何してんるんだ、ばか」
「ご、ごめんなさい」
なんか俺の知ってるお化け屋敷でのイチャつきシチュエーションと違う。
絶対違う。こんな初めての夜みたいな空気にならない。
あ、あそこにおばけいる。
ウボアァァァァ!!!
「キャッ!ぅぅぅぅ／／／／」
やべえ、脅かしてきた人まで萌えてる。あ、睨まれた。嫉妬百%の瞳で睨まれた。やはりここは・・

（・ω・）ドヤァ

あ、殺気。うん、逃げよう。

ヨミチニキヲツケナァァァァァァ

「ひぃっ　あのお、お化け怖いこと言ってるっ！」

ギュッ

イエスッ！役、得